あぶない
タクシー

その１　おまえも泣け

とあるタクシー運転手が、東京・箱崎のエアターミナルで客待ちをしていたら。
若い男性が乗ってきて
「秋田まで」

……飛行機代の方が安いし。

「お客さん、お金あるの？」
と聞くと、
「ありません」
若い男性がしょんぼり答える。
家が秋田だから、着いたら親が払ってくれるという。

車は遠路、秋田へ。
そして男性の家に着いた。

運転手は男性と一緒に玄関に入り、男性が親に事情を話した。
すると親はすごい剣幕で、

「おまえなんか、うちの子でもなんでもない！　出てけ！」

運転手も一緒に追い出された。

若い男性は、親せきの家に行ってくれと運転手に頼んだ。
その親戚だったらきっと払ってくれるし、出てけと言われて行くところもないから頼むと。

親せきの家に向かった。
また二人とも追い出された。

次の親戚へ向かった。
また追い出された。

友人のところへ向かった。
追い出された。

秋田中をぐるぐる回り、どこでも追い出された。

最後に、無賃乗車で警察へ行った。
１時間以上かかって調書をとられた。

「お金は必ず返します！」
男性はひたすら何度も頭を下げてあやまった。
このように本人が「返します」という場合、事件にはならないのだという。

警察の人になだめられ、なぐさめられながら、疲労困憊して東京へ戻った。

待てど暮らせど、お金は返らなかった。
ただし警察に届けているので、運転手が立て替える必要はない。
その分の労働がゼロになるだけ。

運転手にとっては、額があまりに大きい。
「詐欺罪で告発してほしい」
と会社に頼んだ。

しかし会社にとって、弁護士を使って告発するには額があまりに小さい。
「会社も泣くからお前も泣け」
説得されて、泣いて終わった。

と、いう話を、箱崎で乗ったタクシーの運転手から聞きましたー。

その２　で、何人泣いた？

別の運転手が夜中に千葉まで、少々酔ったお客を乗せた。

お客は住所を言い、

「運転手さん、ひと眠りするから近くなったら起こして」

と目を閉じた。

千葉へ向かう。

住所付近に着いたので声をかけた。

お客は「ああ」と言ってすぐ起きて、

そこを右とか、そこで左とか、

眠そうな声で道案内をした。

到着したところで財布を出して

「あれー、悪いね。お金が足りないので、とってくる」

門の格子を開けて入っていった。

待てど暮らせど戻らない。

あの様子だし、玄関で寝こんでしまったのかもと思い、格子を入って

まっすぐ玄関に行き、ピンポンした。

出てきた女の人に話し始めたら、すぐさえぎられた。

「あきれたねー。あんたもひっかかったの？」

女の人は親切に付け加えた。

「あっちにいくと交番があるから、届けていきなさい」

表の格子から入って、裏の格子から出たのだろうと言う。

教えてもらった交番に行き、そこから警察署へ行き、被害届を出した。

疲れ果てて営業所へ戻った。

しばらくして、警察から「面通し」に呼ばれた。

同じような被害が続くため、問題の家のところで張り込みが行われ、

犯人が表の格子から入って裏の格子から出るところを現行犯逮捕されたらしい。

警察には、さまざまな会社の運転手が11人も来ていた。

届けていない運転手は、何倍いるのだろう……

と、いう話を聞きましたー。

その３　娘をよろしく

また別の運転手が、都内の繁華街で夜に客待ちをしていた。
汚いかっこうをした若い女の子が乗ってきた。
「京都まで」

……出ました。例のやつですな！

「お金あるの？」
「ないんです。うちに帰ったら親が払います」
この運転手はわりと慎重であった。

「本当に払ってくれるのか、親御さんに電話をして確かめるから、番号を言って」
電話をかけた。
このような年恰好の、こんな感じの娘さんが、こう言っています、と話したら……

「それは、家出した娘かもしれません！　捜索願も出しました。きっと娘です！　声を聞きたいから電話を代わってぇぇ！！」

電話を代わった。
ものすごく長いこと、ひそひそ話している。
オレの電話使っていつまで話すのか、まいったな、と思っていると、娘さんが言った。
「運転手さんに代わってと言ってます」

再び電話を代わった。
「娘をどうかよろしくお願いします！　お金はいくらでも払います！　逃げないようにして、無事に、ちゃんと、うちまで送ってください！　絶対ですよ、お願いします！」

いよいよまいったなと思いながら、京都まで車を走らせた。

夜明けに着いた場所は、見たこともないような立派な門構えだった。
ためらいながら門柱の呼び鈴を押す。
使用人のような人が飛び出てきて、家の前まで車で行けと言う。
車を走らせ家の前に着いた。

すると家の人が飛び出てきた。

「どうぞどうぞ、入ってください。食事を用意してあるから食べてください。布団も敷いてあるから休んでいってください」

京都の人に食事をしていけと言われて本気にしてはいけない、
とかつて誰かに教えられたことが頭をよぎった。

昔話では、こういう設定で、とり殺されたりするのはなかったか、
とも頭をよぎった。

娘の婿さんになってください、なんていう話になったら困る、
とも頭をよぎった。

判断がつかず、とにかく会社に電話した。

「もう帰庫の時間を過ぎているし、車の中で寝るより、家の中で寝かせてもらえ」

家にあがった。
ごちそうが出て、運賃に加えて謝礼の封筒も渡され、ふかふかの布団で眠った。
起きたらまた食事が出て、そして帰途に着いた。

「それが10年前なんだよねー。あの娘さん、幸せにやってるといいねー」
という話を聞きましたー。

その４　今から届けて

六本木でお客を降ろし、赤坂まで走らせたところで、営業所から無線が入った。

お客がライターを忘れていないか？　と。
後部座席を見たら、ライターがあった。
色も、言われたのと同じだった。

「ありますよ」
「じゃあ、『なんとかビル』のどこそこで待っているそうだから、今から届けてあげて」

内心むっとしながら、なんとかビルは近いし、持って行った。
しばらく待ったが、そのお客はこない。
むっとして引き返し、再び道を流していたら、無線が入った。

「どこそこへ立ってたけどライター持ってこないと言って、お客さんが怒ってる」

とりあわないことにした。
無線が再び入り、そのお客さんが、かんとかの角まで持ってきてくれと言っていると言われた。
とりあわないことにした。

営業所へ帰って、ライターを担当者にわたした。
担当者が驚愕した。

「ええっ、これ、100円ライターじゃない！？」

運転手は、ライターといえば当然、使い捨てのコレと思っていた。
担当者は、当然、高いなんとかライター（デュポンとか？）と思っていた。

担当者は咳払いすると、お客さんが言い置いた電話番号にすました声で電話した。
「お忘れのライターですが、よかったら着払いでお送りいたします」
いらないと言われた。

忘れものにはご注意を。

その５　あやしい点

新しい事実が判明したのでご報告します。

タクシー連作につき「あやしい点」が発見されました。

と、いいますのも。

別の運転手さんが今度は「聞き上手」であったため、
話上手の運転手さんから聞いた話を道中で実演しました。

ほう、ほう、お客さん、それはおもしろいですね、

と非常に喜んで礼儀正しく聞いてくれた運転手さんが、
話が終わってから、あやしい点について教えてくれました。

秋田。
京都。

ここまでの距離となると、かなり説明を省いているか、
あるいは話をつくっている可能性も高い。

なぜならば。

法人タクシーはたいてい、ふつうのガソリンではなく、
経済性を考慮しプロパンガスで走っている。
大都市以外は、夜中に給油できる場所がない。

これが北なら福島あたり以北となれば、まずは予想の時間帯にやっている給油場所を確認してから出発するのが当たり前。
秋田は、あまりに無謀である。

そして京都。細かい説明を忘れましたが高速がどうとかで、同様に無謀である。西なら名古屋まで。

……ということを、とても品よく説明してくださいました。

ちなみにこの会社では近年、エコと経済性を考慮してプリウスの導入を始めており、これだったら、なんと、
神戸ぐらいまで走っても大丈夫だそうです。

燃料的には。
（料金を払ってもらえるのかどうかは別問題）

その６　こわいかもしれない

「道でタクシーをひろおうとしているとき、
空車でないのに間違えて手をあげてしまった」

ということ、ありませんか？

わたしは、たまーにあります。

で、あるタクシー運転手さんの話。

「お客さんを乗せているのに、ついうっかりして、手をあげている人がいたため止まってしまう」

ということがあるのだろうです。

なぜその話になったかというと、私が乗っているのに反対車線から子どもが乗り出して手を挙げたため
（反対車線ですよ）
運転手さんがびくっと反応して、一瞬後

「いや～、とまりそうになりました。こういうことって割とあるんですよー」
と説明を始めたのです。

ええー
そういうことって
「割とある」のかー！？

と思って話を聞いていたら、

「うしろにお客さんがいるのを忘れてしまうことは割とある」

のだとか。

目的地に向かってちゃんと走ってはいるけれども、
お客さんがいること自体は忘れてしまい、
へんな演歌を歌ってしまうことがある。

ええー！

さらに。

般若心経を唱えるのを日課にしているが、
お客さんがいるのを忘れてしまい、
「かんじーざーいーぼーさー」
とやってしまったことがある。

おおー！

しんじられない……！

素人だからそう思うだけで、
そういうこともあるのだろう（？）

と自分を納得させました。

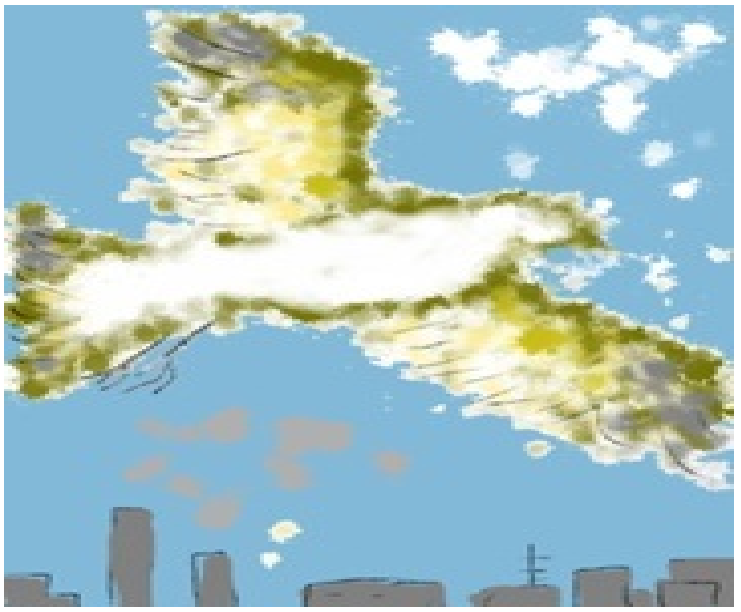
で。
次に乗ったタクシーで、ためしに話してみたら、
運転手さんから

しんじられない……！

という反応がありました。

そうかー
あれは、あぶないタクシーだったのだ。

その７　わたしの場合には



わたしは、タクシーに乗っていたら運転手がいきなり
かんじーざいーぼーさーはんにゃーはーらーみーたー
とお経を始めた

の、ような体験は残念ながらありませんが……。

以前、横浜から乗った車で、
「お客さん、歌を聞いてくれますか～？」
と言われ、

いいですよと答えたら、
テープが流れて歌を聞かされた

という体験はあります。
礼儀と思って拍手をしたら、割引してくれました。

その８　大丈夫ですか？

大晦日に六本木ミッドタウンの中で、派手に転んだ。
経緯を説明する。

わたしは石だかコンクリだかでできたスツールに腰かけ、携帯電話をかけた。電話が終わり、すぐさま立ち上がり歩き出そうとしたところ……。

そのすぐ隣にもスツールがあるのに気づかず、激突、次の瞬間には床にへばっていた。
寝不足が続いていたので、「足もとがふらついてるから注意しよう！」と思ってはいた。
しかし足もとにスツールがあることは計算外だった。

へばった次の瞬間、やさしい若い女性が駆け寄って

「お着物、大丈夫ですか！！」

ちがうちがう、
心配なのは「お着物」じゃない。

心配なのは、かんざし！

へばったまま、髪に手をやる。

かんざしはあった。抜いてみると、無事です、折れてない。
あーよかった。

気を取り直してパッと起き上がり、若い女性に改めてお礼を言いました。

着物が心配じゃなかったのは、理由があります。

転んだために汚したり破損したりしたことは、一度もない。
なりゆきで山に入っても、着物は無事だったし、なりゆきで崖をのぼっても滑り降りても無事。
（唯一着物を痛めたのは、なりゆきで海に入ってしまったときだけ）
ずっと前に道路を走っていたら転んで、膝からも手首からも血が出たときだって、着物は無事でした。

そして今回……。

足には見事なあざが。
着物は、どの該当箇所を調べても、まったく無事です。

だから、転んでも着物は心配しなくて大丈夫。

その９　ワインレッドのベンツ、動くな！

田園調布の友人宅に用事があり、タクシーで出かける。
初めて訪れるため、住所だけでは心細いと思い、目印を聞いた。

「マンションだけど、2階建てでふつうの一軒家に見えるから、まわりと変わらない」
（もっと目印！）

「色はベージュっぽい。まわりも似たような色だけど」
（求む目印！！）

「目の前に駐車場がある」
（もう一声。目立つ目印！！）

「駐車場の左端にワインレッドのベンツがおいてあるから」
（動いちゃう目印かっ）

「右端には黒と白のベンツが」
（……もういい）

行ってきまーす。目印のベンツ、動くなよ！

そして、危惧したとおりだった。
ナビで住所を入れると、その「付近」で、着いたと言い張るじゃないですか。
２ブロックぐらい右へ左へ歩き回った。
結局は、似たような邸宅ばかりの中、ベンツベンツと探すことに。

周囲にはベンツがいっぱいある中、ワインレッドを見つけて「あれだ！」……。
よかった～。動かずにいてくれて。

そういうわけで友人宅に着いたのですが。
「白と黒のベンツはなかったよ」と言ったら
「え、うちのなのに、あるはずなのに」と不安そうに外をのぞく友人。

判明した事実は、その駐車場には、右から、
白のベンツ、黒のベンツ、ワインレッドのベンツ
がとまっているはずなのだった。
なかったのは、白のベンツ。黒のベンツは友人の。

いや～わたしはてっきり、
「白と黒のベンツ」＝「しまうま模様」とか「パトカー模様」だとばかり……。

その１０　骨董市のオキテ

京都で知り合いになった女性が、骨董市のチケットを送ってくれた。
入場料500円が、タダで入れるチケット。

こういう市、東京や名古屋では、物を買うのに入場料をとられても誰も文句を言わないのだという。
同じような市を、京都や大阪では入場無料で開催するそうな……。

１００ぐらいのお店が集結。
茶道具。陶器類。
いろんな布。
昔のおまけ。
美しい細工の煙管。（何十万もするものがケースに収められていて、ひたすら凝視）
簪。帯留。
懐中時計。根付。
アンティークの宝飾品など。

鼈甲に螺鈿のかんざしに目をうばわれた。
2万5,000円。
うう、どうしよう。買えない値段ではない。

じーーーーっと見る。

そこへ、別のお客が、手に取った品をめぐり値段の交渉を始めた。
目はかんざしに向けたまま、耳だけダンボになる。
そのお客は、お店の人に叱られていた。
「これだけ安くしてあるのに引けとは何事か」と。

そ、そ、そうなんだ……。
骨董市のオキテを知らないわたしは、叱られるお客の姿に、少々うろたえる。
かんざしをケースに戻し、「他をぐるっと回ってきます」と声をかけて、立ち去る。

別の店で透かしの金細工のかんざしを見つけた。
１万円ぐらいかなあ。
じーーーーーっと見る。
「それ、3,000円にしときましょうか」

えっ？
びっくりして黙っていると、店主が箱をひっくり返して3,500円の値札を見せる。
あら安い。それをさらに引いてくれるのか？　と首をかしげつつ、
かんざしを、じーーーーっと見る。
「2,500円にしときますよ」
あまりのことに驚きながら買った。

そういうことなのか？　じーーーーっと見ればいいの？
ツゲの小さいかんざしを見つけた。
じーーーーっと見ていたら、2,000円が1,000円になった。

やっぱりそういうことみたいだ！
（オキテを知った気分になる）

最初のお店に戻り、またケースから同じ品を出してもらう。
本格的に愛情をこめてじーーーーっと見る。
店の人は無言なので、こちらもだんまりを続けて、じーーーーーーーーっと見る。

がんばって見続けていたら、もうすぐ終了という放送が入った。
お店の人が、2万1,000円にしてくれた。
買いました♪

その１１　帽子かぶって楊枝加えて空を飛ぶヤマネみたいな動物

＜１幕＞

「気温が下がったせいか、眠くて仕方ありません。
私はたぶんヤマネか何かなのだと思います」
友人Ａがメーリングリストに書いてきた。

わたしは夫に聞いた。
「ヤマネって何？」
夫「ももんがみたいなやつ」
「ももんがって、マタタビみたいなやつ？」
夫「いや……マタタビは植物でしょう」
「じゃあぜんぜんわからない」

マタタビって空飛ぶのかと思ってた。

＜２幕＞

その会話をメーリングリストに書いたら、
友人Ｂに「かわいい」 と言われた。
ぐふふ。かわいい？

「モモンガ、ムササビ、マタタビと連想したんじゃなかろーか」と友人Ｂ。

えっ？　ムササビって何？……写真をネットで見た。
そしてメールした。
「こうなるとマタタビがなんだか、いよいよわからなくなった。
マタタビは帽子とかかぶってるんじゃなかった？
口に楊枝くわえてなかった？」

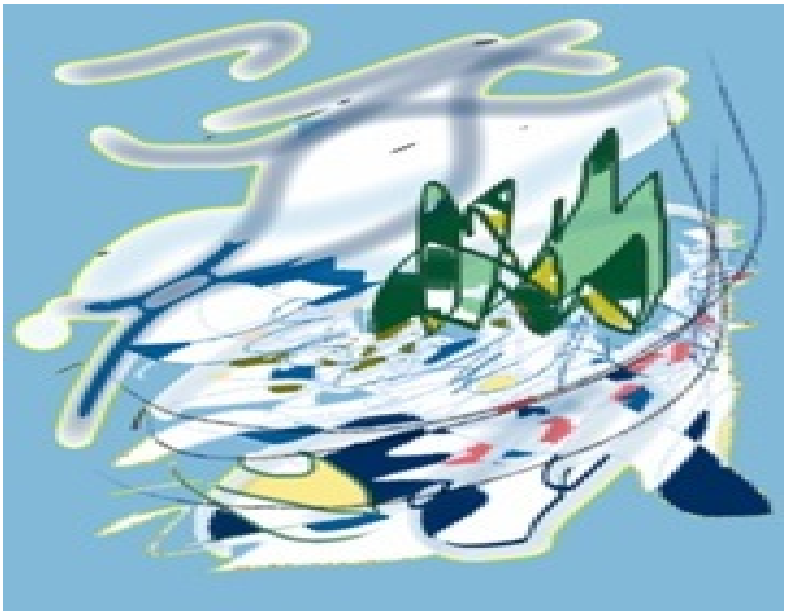
＜３幕＞

このやりとりに、友人Ａから恫喝メールが返ってきた。
「あのう、きみはギャグで言ってるのかね。
マジで言ってるのかね。
帽子って、三度笠のこと？　マタタビは股旅？
それと、気温が低くなると眠くなる話題と、どう、つながるんだあああああ。
木枯らし紋次郎は、秋口になると寝てばかりいるというのかあああああ。
我々は、いったい何の話をしているのだあああああ」

わたしはひるまず返信した。
「世間によくある誤解じゃん？
取り乱すことないじゃん？」

やさしい友人Ｂは、さりげなくかばってくれた。

「帽子かぶって楊枝加えて空を飛ぶヤマネみたいな動物かぁ。
それは、よく探せばいそうだな」



きっといます。